IGF 2023報告書

慶應義塾大学　　内田　祥喜

1. 概要

JPNICによる国際会議参加支援プログラムを利用してInternet Governance Forum 2023(京都)に参加する機会を得ました。この経験について、以下の4点に分けてご報告させていただきます。

「IGFが始まるまでにしてみたこと」
「参加セッションと印象に残ったセッション」
「会期中にあった印象的な出来事」
「今回の経験を今後どう活かすか」
「参加支援プログラムに関する所感」

2. IGFが始まるまでにしてみたこと

大学入学を機にインターネット技術の研究を始め、1年半が経過した今、その大枠を把握するに至りました。この知識を背景に、IGFでのインターネットガバナンスの議論に取り組むことになったのですが、私のアプローチは当初技術中心でした。当時、IGFがどのような規模で、どのような議論が行われているのか知らなかったため、学びの第一歩としてIGFの公式YouTubeチャンネルを利用しました。しかし、そこで目にしたのは技術的議論よりも、インターネットの様々な課題や教育内容に焦点を当てた議論で、それには驚きました。私がこれまで学んできたのは技術面のみで、3月に横浜で開催されたIETF116にも参加した経験から、インターネットガバナンスと聞くと国際的な通信のルールや管理に関する話を想像していました。しかし、実際にはそれ以上の多様な議論がIGFで行われていることを学びました。IGFでの議論の内容は非常に多岐にわたり、例えば「人権」や「エコシステム」「データガバナンス」、さらには「ダークウェブアート」などといったテーマが挙げられます。これらの議論は独特でありながら、IETFのような専門的な用語を必要とせず、一般の人々も容易に理解し、参加できる内容として提示されていました。

勉強を通して、IGFは技術の問題点に触れているのではなく、社会全体の構造や価値観、そして、人々の生活にどのように影響を与えるのかという広い視点を持っていることがわかりました。また、今回の京都で行われたIGFでは、初参加の人でもわかるぐらいAIのセッションが多く、これは技術の発展とそれに伴う倫理的な課題や社会的なインパクトについて話し合うことの必要性についてだと理解が深まりました。

IGFや関連のサイト、そしてYouTubeのメインセッションで頻繁に目にした「マルチステークホルダー」という言葉について、私は深く理解を深めるために学びました。この言葉は、IGFだけでなく、政府の政策策定の際にもよく使われるものでした。IGF2023に参加した際、私はセッションごとに技術者だけでなく、政府関係者や学生など、さまざまな背景を持つ人々が一堂に会して意見を交換しているのを目の当たりにしました。ただ、各セッションの時間が限られており、参加者が多種多様な意見を持っているため、しばしばセッションの終了が迫る中で議論が続けられることがありました。

また、振り返ってみると、もっと前もって確認しておくべきだった点として、APNIC foundationやISOCなど、知り合いが所属している組織のセッションスケジュールをチェックしておくことが挙げられます。確かに、会期中に偶然知人に出会い、彼らのセッションに参加することができました。しかし、未確認の状態で会期中にセッションを探し、一人での参加はなかなか困難だと思います。そのため、今後IGFに参加する際は、予め関連セッションのスケジュールを確認して、計画的に動くことを心掛けようと思っています。

3. 参加セッションと印象に残ったセッション

参加セッション

- HIGH LEVEL LEADERS SESSION Ⅰ~Ⅳ
- (Re)-Building Trust Online: A Call to Action
- OPENING CEREMONY
- OPENING SESSION
- OPENING STATEMENTS FROM STAKEHOLDERS
- Development of Cyber capacities in emerging economies
- Climate change and Technology implementation
- **Meet & Greet for those funding internet development**
- Manga Culture & Internet Governance The Fight Against Piracy
- Exploring Blockchain's Potential for Responsible Digital ID
- Enhancing the digital infrastructure for all
- Decolonise Digital Rights: For a Globally Inclusive Future
- Data Governance in Broadband Satellite Services
- DYNAMIC COALITIONS MAIN SESSION
- OPEN MIC TAKING STOCK
- CLOSING CEREMONY

印象に残ったセッション
APNIC foundation主催: Meet & Greet for those funding internet development

IGFのセッションに参加した際、多くのセッションが受け身で話を聞くスタイルだった中、APNIC foundationが主催したセッションは異なっていました。そのセッションは、私が参加した中で唯一、参加者全員がグループに分かれて積極的に対話する形式を取っていました。また、このセッションが唯一緊張したセッションでした。セッションが始まった際、代表からの挨拶が行われ、その後に隣の人へと順番に自己紹介のタイムが回ってきました。この自己紹介のタイムで、私は予想外にもIGFでの初めての発言をすることになりました。IGFでは、参加者のマイクを通じた発言はすべて文字に記録されます。自分の言葉がリアルタイムで文字に変換される様子を見ることは、確かにIGFに参加している実感を湧かせるものでした。しかし、それと同時に、自分の英語力の不足を痛感させられる瞬間でもありました。さらに、多くの参加者たちは単にIGFへの興味から参加しているのではなく、特定の問題に取り組むために参加しているようでした。このことから、興味があるという理由で来ていることに対しても少し恥ずかしさを感じました。

APNIC foundationは、広大なエリアをカバーする大組織であり、多くの議論ポイントを持っていることが予想されます。この複雑な状況を効果的に扱うため、ディスカッションを3つのグループに分けて進行させていました。各グループが自らの問題点や、所属している組織の取り組みについて共有することで、多様な意見を幅広く収集しているように感じました。参加者たちが自らの組織の取り組みや意見を発表する姿を見て、大きな問題提起も重要ですが、身の回りの出来事からも問題意識を持ち上げることが大切だと認識しました。一緒に行動していた研究会の先輩方もしっかりと発言されていて意見を言葉に出来ることの大切さを感じました。しかし、IGF2023が終了した後にその内容をYoutubeで再確認しようとしたとき、内容を完全には理解できなかったのは少し残念に感じました。

岸田総理のスピーチはMain Hallでのハイライトの一つでした。IGFが国連のイベントであることは知っていましたが、実際の国連の活動やその影響を具体的に感じたのはこの度が初めてでした。高校の教科書で習うだけの情報とは異なり、IGFで総理をはじめとした政府関係者が世界に向けて発信する姿を見て、その大きな舞台の重要性を実感しました。とはいえ、スピーチの内容がAIに特化していたのはちょっと意外でした。AIが未来を大きく変える可能性を持つ技術であることは理解していますが、もう少し幅広いトピックに触れて欲しかったという気持ちもあります。

4. 会期中にあった印象的な出来事

IGF2023の初日、私は京都の国際会館を歩いていたところ、Main Hallの近くでVinton Cerf（Vintとも呼ばれる）と遭遇しました。Vintは「インターネットの父」として世界的に知られ、TCP/IPプロトコルの開発に大きく貢献した方です。彼を目の前にした瞬間、その現実を信じられず、Googleで彼の写真を3度も確認しました。その後、勇気を出して彼に声をかけると、彼は非常に親しみやすく応対してくれました。名刺交換の際、私の名刺に書かれた日本語の名前と慶應のマークを見て、「村井さんの教え子なの？」と尋ねられました。この言葉から、村井さんのインターネット界での影響力や、彼とVintとのつながりの深さを実感しました。

私たちの会話の中で、私はVintに「Do you know DTN?」と尋ねてしまいました。DTN (Delay/Disruption-tolerant network)は、宇宙通信などでの利用が期待されるプロトコルで、実はVint自身が中心となって開発したものです。そのため、彼は私の質問にニコニコと笑って応えてくれました。当初、私は彼がDTNの開発者であることを忘れていたため、彼の笑顔の意味に気づかなかったのですが、後にその事実を思い出し、少々恥ずかしい気持ちになりました。しかし、この一件がきっかけで、彼に私の顔を覚えてもらえることとなりました。セッション後、彼の隣を通りかかると、彼は私に手を振ってくれました。IGFの終了後も、Vintとの写真撮影を求めるファンの列はとても長く、彼の人気の大きさを改めて実感しました。まさに「インターネットの父」として、彼は皆から深く尊敬されている存在でした。

IETFとは異なり、国連関連のイベントであるIGFに参加することで、国際的なガバナンスとその複雑性を実感することができました。IETFは技術的な議論の場で、参加者の出身国を問わず、どの国の人も意見を共有できる一方、IGFは国連の公式な枠組みのため、正式な加盟国でない台湾の政府関係者の参加が許可されていませんでした。私は台湾出身の一般参加者との対話の中で、彼らが「中国」として参加しているとの事実を知りました。台湾政府の代表者が中国として名乗ることは政治的背景から困難で、そのため彼らがリモートでの参加を検討しているとの噂も聞こえてきました。しかし、結局そのような動きはなく、台湾政府の関係者は静かにIGFを傍観することとなりました。このような経験を通じて、インターネットのガバナンスを学ぶだけでなく、現実の国際的な政治的動向を身近に感じることができました。

IGFのイベント中の体験はもちろんのこと、イベント外での交流も非常に印象に残っています。ある日、学校の先輩との夕食後、10時頃に四条を歩いていた際、IGFで知り合った方と偶然再会しました。その方と一緒になって、主に外国の参加者で賑わうカラオケバーへと足を運ぶことになりました。その場にはIGFの参加者が多く、フォーマルな服装をした方々もちらほらと見受けられました。驚いたことに、私たち日本人は先輩と私の2人だけで、マイクの順番が回ってきたときには、日本の人気アニメ「ドラゴンボール」の歌を選択することになりました。しかし、海外の方々のエネルギーと楽しみ方は本当に圧倒的で、私がこれまでに参加したカラオケの中で最も盛り上がった経験となりました。このような彼らのポジティブな態度やエネルギーは、日中の議論や問題への取り組み方にも表れていると感じました。

5. 今回の経験を今後どう活かすか

IGFへの参加を通して、私は自分が持っていたインターネットガバナンスに対する認識が浅かったことを痛感しました。日常で当たり前のように使用している技術や、知らず知らずのうちに習得していたネットリテラシーが、実は世界中の多くの人々の議論や努力を経て築かれてきたものだと気づくと、単に技術を学ぶだけでなく、それに関わるガバナンスや倫理も考える必要があると感じました。

私たちは技術を日常的に利用していますが、それを支える背景や理念、そしてその技術がどのように形成されてきたのかについても理解し、考えることが重要だと認識しました。また、所属している組織やコミュニティにおいても、技術以外の面、例えばリテラシーや倫理、教育についても深く考察し、参与していきたいと思います。

次回、IGFに参加する機会があれば、私は自分の考えや意見をしっかり持ち、自信を持って発表したいと考えています。さらに、多様な背景を持つ海外の方々との意見交換を深めるため、英語のスキル向上も目指して、技術やガバナンスの学びとともに継続的に勉強していきます。

6. 参加支援プログラムに関する所感

以前は原理を知らずに使っていた便利な機械が、実は複雑な技術を駆使して世界中で問題の解決に取り組まれていることを知ることができ、非常に驚きました。JPNIC様の支援のもと、IGF2023に参加できたことは、私にとって大きな経験となりました。これまでの技術的知識に新たな視野が加わり、インターネットに関する理解が深まったことを感じます。参加したセッションやワークショップでの学び、そして現地での交流は私の成長に大きく寄与しました。今後もこの経験を活かして、インターネット技術の進化や社会への貢献に関心を持ち続けたいと思います。

また、新たに技術を学ぶ際には、その技術を利用するのに問題点はないのか、ガバナンスと技術の影響力も同時に考慮してこれからの学習に繋げて行こうと思います。

JPNICのIGF参加支援プログラムに応募して良かったです。